
とある転校生の亜空間膜（ゾーンベール）

RD666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転校生のゾンベール亜空間膜

【Nコード】

N4666L

【作者名】

RD666

【あらすじ】

9月1日、上条の通う学校に転校生がやってきた。

一人は姫神秋紗、そしてもう一人の転校生は

オリストではなく原作沿い、アニメ全話、または小説6巻を読んでいるといいと思います。

国語苦手な趣味なのでかなりくだぐだかもしれませんが、よんでいただければ幸いです。

転校生（前書き）

これを読むにあたって

これは、とある魔術の禁書目録、の原作に沿いぎみです。

原作1〜6または、アニメ全話を見ないと分かんないかも・・・

（できれば原作）

あとキャラ、なるべく崩さない方向でいきたいのですが崩れたらマジでスイマセン

転校生

9月1日

上条は長い長い始業式が始まる前にぐったりしていた。

（わかってた、わかってましたよ、インデックスは飯のことに
なるとありえないくらい行動能力が上がるってことはあ
！）

そう、上条がぐったりしていたのは別に季節外れの夏バテでも、昨
日あった不幸のせいでもなく、居候の純白シスター、インデックス
が食欲の力で自分の通っている高校まで来てしまったのだ。

（あいつ、どうやって高校に来たんだ？まさか一人でバスを？いや
いや、ないない）

心の中で上条が無駄な事を考えていると、

転校生、（上条は結構前から知っていたりするのだが・・・）

ひめがみ あいさ
姫神秋紗が自己紹介をした。

転校生を、年齢偽証した御坂美琴とか神裂火織とか一万人の妹達と
か一方通行とか天使とか想像しまくっていた上条にとっては、転校
生が姫神でかなり嬉しかったりする。

と、

外見は身長130代でランドセルとリコーダーがとつても似合いそ

うな感じの、教師どころか大人にも見えない上条の担任、つくよみこもえ月詠小萌先生が

「みなさ〜ん、なんと転校生はもう一人いるのです〜」
と、ちよつとしたサプライズのように言い放つ。

『おおー！』と言うクラスの男女一同。
しかし、

上条はそれを聞いてゾツとしていた。

(まさか、まさか？まさか！？さっき思っていた事が現実に――
！！！！！！)

と、クラスの中で唯一戦慄する上条だったが、

「なんと、もう一人は男の子なのです〜」

不安は杞憂に終わったようだ。

クラスの男子ががっかりしていた。が、一部は
『上条でもさすがに男ならフラグは立たないぜ！』ハイになってると言ってるやつもいるが、上条は聞かなかったことにする。

(なんだ、よかつたあ〜。いや、ちよつと待て、まだ一方通行が女
ときまつたわけじゃ〜)

と上条が不安要素が完全には消えていないのに気付くと同時に

「それでは、入ってきてください〜」

もう一人の転校生が入ってきた。

転校生（後書き）

どうでしたか？（上条と小萌しかでてませんが）よかったらコメントください。

更新は多分遅いと思います。

書き始めたのですが6巻が手元になく、はやくもどんずまりです。そんなわたくしですが、これからもよろしくお願いします。

始業式（前書き）

進みが遅いです・・・

高一なので更新もまばらになりそうですが、
応援よろしくお願いします

始業式

入ってきた転校生は、「普通」だった。

金髪だったり、青髪だったり、全身真っ白でもない。

髪は長く、立ててはいない、服装は長そでのYシャツをまくついで、中に白と黒の服を着ている

しかし、

色は光という光、色という色を混ぜたような『光のない黒』だった。逆に特徴的なのはそこだけで、後はいたってふつうで暗そうないメージだ。

彼は黒板に名前を書いて

「はじめまして、麻月歪あさつきひずみです。大能力者レヘル4、よろしく」

明るく言った。

「はい、麻月ちゃんのせきは窓側の一番後ろですね。」

（）ってことは俺の後ろか。（）

上条が考えているうちに、彼は席についていた

「あ、ヨロシク」

彼にそう言われたので

「ああ、俺は上条当麻かみじょうていま、よろしくな、え〜っと・・・」

「歪でいいよ」

「わかった、歪だな。」

上条が確認をとると歪が閃いた顔をして

「ああ、さっきのシスターさん、キミを探してたんだ。キミだろ？
』とつま』って。」
数分前のいやな思い出を掘り起こされた。

「ま、まあな・・・とそうだ！歪この後暇か？一緒にこの辺まわろうぜ」

インデックスの事もとりあえず『上条にはあんな友達がいる』と知
っているし、インデックスは『完全記憶能力』で覚えてるだろうし。
問題はないはずだ。

「いいよ、この学区の事よく分かんないから、一人で歩こうと思っ
てたし」

歪もこの後に予定はないようだ。

「よし。じゃあ後でな」

そう、上条には始業式をすっぱかしてでもやるべきことがある。

(おのれ馬鹿インデックスシスターめ・・・探し出して説教だ)

フフフ・・・と黒い笑みを浮かべ上条は体育館とは別の道に抜けて
行った。

もちろん、本日初登校の歪は上条の抜け駆けには気付くことはなかった

歪は始業式開始3分で「帰りたい」とおもっていた。

(はあ・・・能力のおかげであんまり疲れないけど、時間がもったいないよなあ・・・)

寝たいが歪は残念なことに、たつたまま寝れるなどという便利スキルは持つてはいなかった。

はああ・・・と盛大にため息をついたとき・・・

気付いた。

(あれ？上条は？・・・っは！あいつまさか・・・)

サボりだ！と歪は瞬時に理解した。

実際、いま上条はシスター探しがばれて説教中だったりするが歪は知る由もなかったりする。

そして、歪は『最初だからしっかりしないと』という精神はない。

(よし、派手な方法だけど・・・行くか!!)

そして歪は体育館の床に沈んでいった

この時の着地場所の目の前に上条御一行がいるわけなのだが・・・

始業式（後書き）

『光のない黒』は想像におまかせします。
てかりが無いんです。イメージとしては
とりあえず能力の弊害とうせっています

放課後（前書き）

中間試験があつて投稿遅くなりました。
本当にすいません。

放課後

数時間後・・・

上条と歪はぐったりしながら学校から出てきた。

誰だって始業式に使う時間をそっくりそのまま説教に費やされたらぐったりはするだろう。

(転校初日からなんて失態なんだ・・・)

まあ、初日から学校サボるやつに『ツいてるぜ!』と言えるような事が起こるなんてことはないと自分でも思うが・・・

上条は上条で

(まさか上条当麻のかよう学校にあんな無差別級ゴリラがいるとは・・・)

上条がこのような感想を抱くのは別に夏休みの間に教師が変わったからではない。

むしろ変わったのは上条の方だ。

上条は7月28日以前の記憶を失ってしまった。

しかも、医者が言うには『記憶喪失』ではなく、『記憶破壊』だそうだ。なので、もう元には戻らないらしい。

『知識』はあるが、大切な人との『思い出』は、無い。それが今の上条の状態だ。

しかも、これはみんなには秘密だったりする。特にあのシスターに
インデックス
は、

そんなわけで、上条も今日が実は『初めて』の登校だったりする。

はああ・・・

と登校初日にやらかした二人はため息をついた。

「あつ、さっきのシスター」

真つ白シスターを指さして上条に話しかける。

「お、いたいた。おゝい、インデックス、風斬」

風斬？と思ったが、もう一度見るともう一人、長い髪の前の方を髪留めで止め、そして『眼鏡っ娘』をまさに体現しているような少女がいた。

（あれ？ずっといた？さっきは全然気付かなかった）

はて？ と歪は頭に「？」を浮かべていたが、

「ん？歪？大丈夫か？」

上条が心配してきたので、

「いやあゝ、朝からハードだったからちよつとボーっとしてた」

（まあ、一瞬しか見なかったし、影が薄かったただけだろうな、うん）

歪は割と失礼な結論にたどり着いて、歪は会話に混ざる。

「あ、とうま。それとさっきあいさと一緒にいた『てんこーせー』だよね？」

シスターが明るい笑顔を浮かべながら話しかけてきた。

歪は正直面くらった。そもそも自分とシスターが会ったのは一瞬だ。

『服』が印象的だったから覚えていただけで、顔はおるか、今やつとシスターが綺麗な銀髪をしているのに気がついたくらいだ。

だから、

「そだよ、一瞬だったのによく覚えてたね」

歪は素直な感想をいった。

かんぜんきおくのうりよく

歪は知る由もないが、彼女は『完全記憶能力』を持っていて、一瞬見たものでも絶対に忘れないのだ。その体質を使って10万3000冊もの『魔導書』を一字一句間違えずに記憶している。人の顔なんてラッシュアワーの人ごみ全員を簡単に覚えるくらいだ。だから、

「人の顔を覚えるなんて一瞬あれば十分なんだよ」と、『なにを当たり前のことを』という顔をして言った。ものだから（あれ？俺の常識がずれてるの？）歪は若干、自分が薄情者なのではないかと不安になる。

そこで上条が

「とりあえず、まずは自己紹介しないか？インデックスも風斬も歪も初めて会うんだしさ」

「それもそくだね」

歪は同意する。

「まず俺ね、麻月歪あさづき びよと。LEVELは4」

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ」

「風斬氷華かざきり ひょうかって言います」

「とりあえず俺も、上条当麻かみじょう だまだ。よろしくな」

「インデックスに風斬ね・・・OK。歪ってよんでくれな」

そうして自己紹介がおわったところで、上条が

「それじゃ、どっかに飯食いにいくか」

「家で食べるんじゃないの？」

インデックスが聞き返す。

上条はあっさりと、

「どうせ飯食ったら後遊ぶんだし、その方がてまが省けるだろ？風斬もどうだ？」

「え？」

風斬が驚いたように聞き返してくる。

「そうだよ、ひょうかも一緒にいい」

インデックスもその気のようにうなずく。

「いいの？」

「人数は多い方が盛り上がるしね」

歪もその方がいいと思った。

「いこういこう!」

「えっと・・・ありがとう」

どうやら風斬も来ることになったようだ。

そうこうしている内に気付いたら高校を出ていた。

「よし、案内頼むよ。上条!」

「じゃあ行くか・・・っと、その前にATMから金おとしてくるわ」

「ならべく早くね」

「分かってるって」

そう言っ上条は近くのコンビニへ走って行ってしまった。

放課後（後書き）

え、

原作6巻がありません！（泣）

次回からは流石に無いとむりそうです。

コンプレックス side in Karajio (前書き)

やっと6巻が・・・ろっかんがぁ・・・

というわけで出来上がりました。

読んでくれるとうれしいです

「コンビニ」にて side in Kamijo

コンビニで金を下ろしている時、上条は誰かに袖をひっぱられた。インデックスがお菓子買ってくれとか言いに来たのか？と思い振り返ってみると、

もう一人の転校生姫神秋紗ひめがみ あいさが立っていた。

「あれ？姫神？」

なんでここにいるんだらう？と上条が思っていると

「転校生なのにその淡泊たんぱくなりアクション。やっぱり私は影が薄い女なのね」

と、なにやら暗い空気オーラが姫神の周りに立ちこめた。

上条にとつてはとある事件により監禁されていた姫神を救うために魔術師れんきんじゆつしと戦い、右腕を肩からぶった切られる大けがを負って助け出したという精神的メンタル外傷がいじゆうじみた夏の思い出があるので、薄いリアクションなのはしかたがないだろう。

（ああ、そつかあゝ、姫神も転校初日なんだよな・・・）

「あ、あの〜姫神さん？なんだか暗い空気オーラが立ち込めてるんですが・

・・・」

上条が申し訳なさそうに話しかけると、

「そんなことより」

「（そんなことって・・・じゃあさっきの空気はいつたい・・・？）」

「あそこにいるメガネのこ。風斬氷華かみきり ひよっかでいいの？」

姫神は外にいる風斬を指差した。

「？、そうだけどなんで？」

そう言った途端に、姫神の目が鋭くなる。

「おい、どうしたんだよお前」

「風斬。氷華」

姫神の声はいつになく真剣だった

「私の通っていた学校について。知ってる？」

「いいや」

そういえば、上条は姫神の今までの生活の事はあまり知らない。

「私の通っていた霧ヶ丘きりがおかじよがくいん女学院は『珍しい能力』チカラを重視する学校だった。そして、その学校でも風斬氷華の名前があった」

「ってことは風斬はお前と同じ学校トコロから来たのか？」

姫神が首を横に振り。

「転校生は。私と麻月君しかないはず」

「なに？」

上条にはわけが分からない。風斬は確かに『自分は転校生』と言っていた。

では、風斬氷華かざきりひょうかはどこから来たのか？

「問題はそこじゃない。風斬氷華かざきりひょうかはいつもテストの上位ランクだった。でも、生徒は誰も風斬氷華を見た人はいない。先生ですら。知っているのはごくわずか」

姫神はそこで一度言葉を区切り、

「何よりも重要なのは。彼女は『正体不明』カウンターストップと呼ばれ」

「同時に。虚数学区・五行機関の正体を知る鍵だと呼ばれている」
上条は絶句した。おそらく、学園都市の学生なら当然の反応だ。

虚数学区・五行機関

学園都市の学生なら一度は聞いたことがあるような都市伝説だ。それはどこにあるか誰も分からない学園都市最初の研究機関。今の学園都市の科学でも再現できない『架空技術』を有しており、今も学園都市を影から支えているこの街の暗部。

「けど・・・そんなのって・・・」

「うん。私も真実は分からない。だから忠告しておく。風斬氷華には気をつけてね」

そう言っつて姫神は立ち去ろうとしたので、

「ちよつと待てよ。俺達これから遊びに行くんだけど、お前もどうだ？」

それを聞いて振りかえつた姫神の顔は、どこかびっくりしたような顔だった。

「・・・小萌こもえの・・・バカ」

「え？」

「なんでもない。用事を頼まれているから。私はいけない」

「そっか、じゃあまた今度な」

上条が立ち去ろうとした時、姫神が何か思い出したように。

「あ。そうそう」

「ん？」

「麻月くん。霧ヶ丘きりがおかじよがくいん女学院でも聞いたことがある。先生が『男じゃなかったらなあ』ってばやいてたから。何か『珍しい能力チカラ』をもっているのかも」

「へえ〜そうなのか。っとインデックスとかが待ってるんだった、またな姫神」

姫神に別れを告げ、上条はコンビニを後にした。

(『珍しい能力チカラ』・・・か、後で歪よこしまに聞いてみるか)

コンパクトで side in Kamijo (後書き)

長ったらしくなっていました・・・

この辺はいろいろと説明が多いのでなんとかコンパクトにできるように頑張っていきたいと思います

繁華街にて side in Kuroko (前書き)

え、今回からしばらく上条御一行はお休みの気配です。
すぐに出せるようにがんばっていきたいです

繁華街にて side in Kuroko

学園都市の繁華街、そこに一人の少女がいた。

茶色い髪をツインテールにしている、中学生くらいの少女だ。服装は名門私立・常盤台中学ときわだいちゅうがくの制服をきている。

そんな白井黒子しろいこくろこは街を歩いていた。

彼女は別に始業式が終わった後のヒマ潰しに外を歩いているわけではない。彼女は今日、公欠扱いだ。

彼女は人を探していた。もちろん、はぐれた友達を探しているわけではない。

というか、白井はその人には会ったことすらない。

彼女は『風紀委員』ジャッジメントだ。

『風紀委員』、と聞くと校内と校外の自分と同じ学校に通う生徒の風紀を取り締まる者……

なのだが、『学園都市』ではその意味は少し、いや大きく異なる。

学園都市の『風紀委員』はいわば、機動隊のようなものだ。学園都市の人口の内8割は学生。しかも、その学生のほとんどが強弱があるにしろなんらかの能力チカラに目覚めている。その能力チカラを悪用する者達

も、自然に出てくるのだ。誰だつてもものすごい力を手に入れたら、

一瞬はその考えが頭をよぎるものだ。ただでさえ、学園都市は『外』

とはケタ外れの最新兵器がゴロゴロあるから犯罪が多いというのに。

それを抑えるのが能力者の『学生』で結成された組織、『風紀委員』ジャッジメントだ。

ほかに、学校の『教師』で結成された。最新鋭兵器の武装集団、『警備員』アンチスキル、と言う集団もある。

（まったく、新学期開始の日だというのに……少しはこちらの事情も考えてほしいものですわ……）
つまり、『ジャックメント風紀委員』が会ったこともない人を探しているということとはつまり、なんらかの事件の『容疑者』または『犯人』ということになる。

（っと……いましたわね）

白井の前方の人ごみの中に、手配書と瓜二つな人物を見つけた。しかしここは人が多いので、もし相手が交戦してきたらいろいろとまずい。

そう判断した白井は、しばらく『犯人』を尾行することにした。

繁華街にて side in Kuroko (後書き)

今回はこんな感じで・・・

区切りのいいところで章を変えたいと思っているので、これから短い、長い差が出るかもしれません。

闇の中 side in Tutimikado (前書き)

以外とアレイスターさんの口調がムズイ……
変だったら指摘お願いします

闇の中 side in Tutimikado

時は少しまき戻り、学園都市の窓のないビル。

入口も通気口も廊下も階段もなく、大能力者の『レベル4空間移動』を使わない限りは入れない、建物として機能しないビル。

周りはおびただしい数の機械でうめつくされており、中心にある強化ガラスでできた筒につながれている。そのガラスの筒の中は赤い液体で満たされ、筒の中心には手術衣を着た『人間』が逆さづりにされていた。

学園都市・統括理事長、『人間』アレキスター・クロウリー。

機械による生命維持で、推定1700年の寿命を手に入れた、男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える『人間』としか表せないような人物。

そんな『人間』の前に、小柄な『テレポーター空間移動能力者』の少女に連れられて一人の男がやってきた。

短い髪を金髪に染め、ハーフパンツにアロハシャツ、それに金のネックレスにサングラスまでかけた、身長180センチ程の大男だ。

どんな場所においても不審者の評価を受けそうな感じのこの大男の名はつちみかどもとはる土御門元春。

こんな所にいるが、彼は上条当麻のクラスメイトだ、しかし彼は、インデックスのいるイギリス清教・『ネセサリウス必要悪の教会』のメンバーで、『かくえんとし科学側に潜伏しているスパイ、しかし実は、『ネセサリウス必要悪の教会』の行動を学園都市にも伝えていたり、そのほかの組織に両方の情報を密告したりのなんでもありな多角スパイだ。

今回の彼はイギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒として来ていた。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか？」

この口調は彼の『表』の口調ではない、いつになく真剣で、どこか焦っているような口調だった。

多角スパイな彼には、あまり上下関係というものはないようだ。

対して、アレイスタ は

「構わんよ、少しルートを変更するだけで、プラン二〇八二から二
三七七まで短縮でき」

アレイスターが言い終える前に彼はガラスの筒に一枚の写真を叩きつける。

「言っておくが、今回ばかりはアウレオルスのようにはいかんぞ」

「シェリー・クロムウェル、こいつはアウレオルスのような流れの魔術師じゃない、真正正銘『必要悪の教会』のメンバーだ。こいつを学園都市の力で撃退してみる、あつというまに学園都市と必要悪の教会の亀裂のできあがりだ」

土御門は苛立ちと不安を混ぜた口調で、

「とにかく、俺はシェリーを討つぞ。魔術側にいる俺がシェリーを倒したなら、波紋は小さくなる。まったくもってゼロにはならないと思うが・・・」

と、土御門があれこれ作戦を練っている時

「君はてを出さなくていい」

アレイスターはなんのけなしに言い放った。

土御門は凍りついた。言っている意味が分からない。

「君は手を出さなくていいと告げた」

凍りついた思考がだんだん元に戻り、ひとつの答えを導き出す。

まさか・・・

「また幻想殺しかみじょていしゆを使うつもりか」

土御門は信じられないという顔をして、

「正気か？確かに上条当麻は魔術に対するジョーカーだ。何度か魔術師とも作戦をとにした。だからといってそんなにバカス力使っていない存在じゃあない。大体、そこまでの危険性を侵す理由がどこに」

「プランが短縮できる、理由はそれだけだが？」

その一言だけが理由だった。一歩間違えれば過去最大級の戦争が起るというのに、この『人間』はなんの躊躇も無い。

土御門はチツ、と舌打ちをして

「いくら虚数学区・五行機関を制御するにしたって、急ぎすぎじゃあないのか？アレイスタ」

そう

アレイスタの話では虚数学区・五行機関を制御するには上条当麻が必要らしい。そのために上条当麻には戦闘経験をつませる。それがアレイスターの『プラン』だ。

「なにせ世界の捻じ曲げるような暴れ馬だ。手綱は早く持ち直したほうが利口だろう？」

そう言つてアレイスターは笑う

嘲るような、哀れむような、楽しむような、喜ぶような喜怒哀楽の混線した笑み。

「それよりも、君にはいろいろとやることがあるのではないか？君の努力しただいでは水面下の工作戦でも死者を出さずにすむかもしれんぞ？」

そう言った瞬間、今まで見ていたかのようなタイミングで『空間移動能力者』の少女がやってくる。

土御門は舌打ちをする暇もなくその少女に連れて行かれた。

誰もいなくなつた空間でアレイスターはつぶやく。

「なに、今回は数名、特別な招待客ゲストもいるのでな。君の努力には期待しているよ」
そう言って何も無い空間でアレキスターは笑っていた。

闇の中 side in Tutimikado (後書き)

いやはやこの場所は難しい……

ポイントが上がっていると、作者は嬉しさ爆発なのでよろしく願
いします。

できれば感想を書いてくれるともっとうれしいです。

繁華街の戦闘 side in Tokiwadai's (前書き)

このへんってやっぱり難しい。

繁華街の戦闘 side in Tokiwadai's

そして時は現在に戻る。

繁華街に金髪の外国人の女性が歩いてきた。しかし髪は手入れをしていないのか、いたるところが跳ねている。

服装は擦り切れてボロボロのゴシッククロリータで、この学園都市ではかなり目立つ。まあ、学園都市では年齢が20代後半というのもかなり目立つのだが……

彼女の名前はシェリー・クロムウェル。『必要悪の教会』のメンバーだ。

学園都市では目立ちすぎる彼女は、自分が手配中なのに気付いていないのか、または気づいているが、やってきた敵達ザユは簡単に排除できるかのようなふるまいで、のんきに街を歩いていた。

(つと、いましたわね)

白井黒子シロイクロコは手配書のゴスロリ女を追いかけていた。

追いかけた、というよりは尾行しているっと言った方がしっくりくる。

人がいない場所まで尾行して捕獲……しようと思っていたのだが、ここは繁華街なのでいつこうに人がいなくなる心配がない。

(やむおえませんわね……これを使つと始末書を書く破目になりますのよ、ね！)

心の中で愚痴を呟きながら、白井は銃口がやけにでかい拳銃を取り出して、それを放つ。

花火のような光と音の後、周りにいた学生達が一斉に逃げだす。

これは警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントが使う『戦闘があるからさっさと逃げろ』

という意味の照明弾だ。

照明弾が光った後、周りにいた学生は嘘のようにいなくなり、残ったのは風紀委員ジャッジメントの白井とその照明弾の意味を知らないシエリーだけだった。

「動かないでいただきたいですね」

「風紀委員ジャッジメントですの。自身が拘束される理由は、言わなくてもわかりますわよね？」

「探索中止。……たく、手間かけさせやがって」

白井がそう言った途端、シエリーはつまらなさそうに懐から何かを取り出そうとする
と、

瞬間

シエリーの目の前に突然白井が現れた。

それもそのはず、白井の能力は大能力者レベル4の空間移動テレポートだ。彼女は触れた物質（自分を含め）を線の移動ではなく、点と点の移動にすることが出来るのだ。

そんなことも知らないシエリーは、ネタが分からないマジックを見ているような顔をしていた。

「ですから

次に白井はシエリーにふれ、地面に寝そべる形で空間移動テレポートさせる。

シエリーはびっくりした顔のまま、何もできずに地面に仰向けにされてしまう。

そして白井はさらに太ももにある金属の矢を空間移動テレポートさせ、追い打ちをかける

「

動くな、と申しております。日

本語、正しく伝わっていませんか？」

しかし、
服を地面に縫い付けられて体の自由を奪われたシェリーは、それでも薄く笑っていた。

手にはいつの間にか学校でよく見るチョークのようなものがあり、それで地面になにか書いていた。

そして、何かが書かれた地面が突然爆発した。

「な……ん、です……ッ!？」

白井は爆発に巻き込まれ中に浮く。

爆発した地面のかけら

かけら、というにはやや大きい

が白井を中心に集まって行き、やがて大きな腕になり、
体も作られていく。

（まさか……『外』のテロリストの癖、に能力者……です
の!?)

白井はコンクリートやガードレールでできた大きな腕に捕まってしま

まう。
（ま……ずい……です、わ……とりあえず体勢を）

そう思った途端に、腕の力が強くなり、白井をさらに締め付ける。

「ぎ……あ……!！」

力が強すぎて白井は息をすることも難しかった。

『^{テレポート}空間移動』の弱点は演算の処理の難しさだ。^{テレポート}空間移動とは、3次元的な制約に囚われず、自在に虚空を渡る力だ。一見何も難しいこととは無いように見えるが、3次元の自分の座標を1次元の自分の座標に置き換え、そこから移動ベクトルを演算しなければならぬ。だから、ほかの能力者の演算とはケタ違いに難しい。なので^{テレ}空間移

ボーター

動能力者は痛みや焦り、混乱があると演算ができないのだ。

白井が自分の能力も使えなかったその瞬間、轟音とともに

大きな腕が付け根から叩き斬られた。

白井は何が起きたかわからず、しばらく落下しているのも忘れてきよとん、と見ていた。

斬られた腕と体の間に黒い煙のようなものがかすかに舞っている。

（あれは……まさか……『砂鉄の剣』！？っということ
は、まさか！）

白井が状況を理解したと同時に、聞き覚えのある声が飛んでくる。

「何の騒ぎか知らないんだけどさ」

ピン、という何か小さな金属をはじく音がやけに響く。

「私の知り合いに手え出してんじゃないわよ！！」

怒りの声とともに、白井の後方からオレンジ色の光線が現れる。

『レールガン
超電磁砲』

音速の3倍で放たれたコインが石像のような腕と体を木端微塵にする。音より早くコインが到達したので、大きな轟音が後から響く。

その人物の登場でいつものポテンシャルを取り戻した白井はとりあえず地面まで空間移動する。テレポルト

白井が後ろを振り向くとそこには予想道理にみさかみこと

学園都市の第三位、御坂美琴が超電磁砲を打ち終わった姿勢で立っていた。

「もう大丈夫よ、黒子。あのでっかい石像は囷だったみたいだし」
白井が美琴の視線を追うと、さっきゴスロリ女を縫い付けた場所には、金属矢とちぎれた布のようなものしか残っていなかった。

繁華街の戦闘 side in Tokiwadai's (後書き)

こんなかんじに仕上がりました。

戦闘シーンは難しいのなんのって……

ポイントもええればうれしいです。どうぞよろしくお願いします。

亜空間膜（ゾーンペール）（前書き）

上条さん御一行、ついに復活です。

まあ、駄文ですがどうぞお読みください。いや、ホントにお願いします。

亜空間膜（ゾーンペール）

第7学区の地下街の大道りで、全身菌形まみれの上条は心の中で首をかしげていた。

まあ、姫神から聞いた風斬の情報も気になるにはなるが、最も気になっっているのは歪のことだ。

さつき学食レストランでインデックスがあればほど安いのにしなさい！っとキツク言いきかせていたのに、一食4万とかいう破格もいところの常盤台セットなんかを頼みたいなどと騒ぎだし、しかも騒ぎの中でそれを風斬にまで勧めだし、誰が払うのか分かってんのかコラア！！、っと上条の怒りが沸点に達しそうになった時。

まあまあ、いいじゃない食いたいんだから、と言いなながら歪が二人分払ってしまったのだ。

8万円もの大金（+自分の分）を何の躊躇もなく払ってしまう歪は何者なのかと上条はこんなのを毎日食べているお嬢様を思い出しながら考えていたのだ。

それ以外にもゲームセンターのゲームを見てリミッター解除となつたインデックスがゲームセンターのゲームを一周し上条の財布が限界になり、さいごのプリクラでカーテンが勝手に落ちたのに（本当に上条はカーテンに触れてもいない）上条だけ断罪を喰らい（歪は後ろ向いていてセーフ）とあいもかわらず不幸絶好調だったのだが・

今はそんなことはなく、（不用意にファミレス行こうものならインデックスが片っ端からメニューを頼むので）
とりあえず座れる場所はないかと話題もなく4人は歩いていた。

しばらく話題が無かったので、上条はとりあえず考えても分からない自分の疑問を話題にすることにした。

「そついえばさ、歪はどこから転校してきたんだ？」

「ん？長点上機学園」

歪は考える様子もなく、即答した。

はい？つと上条の目が点になる。

インデックスや風斬は訳が分からないらしく、『何にびっくりしてるの？』という顔をしている。

長点上機学園

学園都市にある学校の中でも1位、2位を争う学校だ。記憶の無い上条にも『知識』として頭の中に入っているほどのすごい場所だ。

「でも、なんでそんなところからいきなりこんな学校にきたんだ？そんな頂点ちうてんにいたならポンポン大金出せても不思議ではないが、それだといきなりこんな底辺ちどうにくるのがオカシイ。

「ああ、それはまあ暴力沙汰というか、なんとというか」

答えになつてるようになつて無いような返答を歪がしたので、上条はこれ以上他人の過去を詮索するのをやめた。そうすると歪が独り言のように。

「よく、分からないんだ。俺の能力チカラは全く攻撃できないっていうのわかってるはずなのに、スタミナ切れで倒れていた俺に喧嘩を売ってきた奴らは退学にならなかつたし」

「攻撃できない？、てか、そもそも歪の能力まだ聞いてなかつたな」
そいいえば歪はかなりレアな能力らしい、と姫神が言っていたし、上条も天井から歪が落下してきたのを見ている。

空間移動……

とは少し違つた気がする。空間移動ならそこその数があるはずなので、重要サンプルとか唯一無二かなりレアとかは言われぬ、と思う、多分。

歪は少し困った顔をして。

「ん〜と、なんか特殊すぎて説明しにくいから……まあ害はないし実験でもいいか」

そう言つて歪はインデックスの肩に触れる。すると……
インデックスの肩が消えた。

「な……ッ！」

さらに驚くべきことに、消えたのは本当に肩だけで、肩から下は普通に浮かんでいる。インデックスも痛みや不快感は感じていないよ
うで、普通の顔をしている。

インデックスは横にいる風斬の気絶しそうな顔を見て、風斬の目線の先の自分の肩を見る。

インデックスは最初にきよとん、次に顔を真っ青にして、

「ひゃ、え！？ッ、な、ナニコレ！？」

インデックスは自分がどういふ状況なのか分からないので、触ることのできない羽虫が肩に乗っかってるような感じのまま固まっている。

「学園都市の中では、俺しか持っていないんから分類できないんだ
つて」

そういつて歪はインデックスから手を離す。

そうすると、インデックスの肩は元に戻る。インデックスは自分の体が元に戻つてホッとした顔をしていた。

「能力名は『ソーンベル亜空間膜』つて言つて、内容は『自分の皮膚の上の一
ミリ上の空間そのものを捻じ曲げ、押し広げる』つていうものなん
だ」

それから歪は少し考えて、

「まあ、例えるなら虫眼鏡で光を屈折させる、それを空間全てを使
つて行つつかんじ？」

「ふーん。なんか、アクセラレータ一方通行みたいな感じだな」

アクセラレータ一方通行、学園都市の七人しかいないレベル5に一人で、その中の

第一位。能力は『運動量、熱量、電気量、その他あらゆるエネルギーのベクトルそのものを皮膚に触れた時点で変換する』という能力もの。そんな反側能力者と上条は死闘を繰り広げ、自身の右手に宿るチカラを使い、ポロポロになりながらなんとか倒したのだが。

そんなことを思い出し、ちよっぴり暗いムードな上条を見て歪が心配そうに『どうした？』とやってきたので、上条はいや、なんでもないと力なく答える。

「？、でもそんなに攻撃的べんりな能力じゃないよ。あくまで『空間』を捻じ曲げるだけで空間そのものはつながってるから、空間切断なんて漫画みたいな技もできないし」

「へ、へえ、そっか……」

何の能力も持っていない上条には空間捻じ曲げただけでも十分すごいのだが……

でも上条はなんとなく歪の能力を上条なりになんとなく理解した。
アクセラレータ

一方通行は全てを皮膚の上で『反射』する最強の盾なのに対し、歪は皮膚の上の『距離』をいじる最強の盾、という感じ、だと思う。

「こつちもネタバレしたんだし、上条の能力チカラも教えてほしいな」
歪が交換条件と言わんばかりに、うれしそうに微笑んで言った。

「んあ？俺は真正銘の無能力者レベルで能力なんてないぞ」

「嘘だね。俺の能力は寝るとき以外自己防衛システムとして機能してるから、わかる」

そうして歪は確信をもった顔で、

「さっき上条とぶつかった時、俺の周りの亜空間が消えたんだよね。どんなチカラ、使ったの？」

そう言えば、上条はさっきのファミレスでインデックスと騒いでいたとき、右隣の歪とぶつかった気がする。

「ああ、あの時触れてたのか。」

上条は頭を掻きながら。

「別に隠そうとしたわけじゃねえんだけどな。実際無能力だし。」
「俺の右手な、イマジンプレイカ幻想殺しって言つて、それが『異能の力』でできて
るんなら右手が触れただけで打ち消せるんだ」
歪はなるほど、という顔をして、

「学園都市の都市伝説、『能力が効かない男』はてつきり自分だと
おもつてたけど、実際は上条だつたんだ」

「……なんだ、その都市伝説……?」

いつ自分は都市伝説なんかになつたんだ?と上条は思った、が。

(そういえば定期的に御坂美琴セリギリの電撃喰らいながら街中逃げまわつ
てるし、仕方ないかあゝあんなことしてれば都市伝説になるな、絶
対)

(でもそんなチカラが無能力なのかねえ?)

そんな二人の会話に風斬とインデックスはついていけず、無視され
たインデックスの怒りが頂点に達し、上条は頭を噛みつかれたのは
二人の会話が終わつて3秒後であった。

亜空間膜（ゾーンペール）（後書き）

そんなこんなでオリキャラ能力発覚編でした。

どっかで聞いたことあるかもしれないませんが、思いついた自信作だったのでどごそのキャラとかぶっても気にしないでくれるとありがたいです。

感想とかくれるとうれしいです。

アドバイスなども、できればよろしくお願いします

崩壊

そんな中、インデックスと風斬が、急に周りをキョロキョロと見始めた。

「急にどうしたんだ？お前ら」

まさか、腹が減ったから食い物がある店でも探し始めたのか？普通の人はそんなことないけどインデックスならあり得るし。

そう思い冷汗を少し流しながら上条が尋ねると。

「と、とうま。今どこからか声が・・・ね、ひょうか」

「うん・・・なんか、頭に直接響いたみたいな感じ・・・」

「声？」

こんどは歪が不思議そうに聞いている。

もちろん、上条にはさっぱり聞こえなかった。この様子だと歪も全然きこえないらしい。

「空耳じゃないのか？」

上条がそんな無責任な事を言った瞬間。

「こら！そのあなた！人がこれだけ言ってるのに、何ぼーっとしてるの！」

なんか怒っているようなよく通る声が、上条たちの後ろから聞こえてきた。

見ると、そこには『風紀委員^{ジャッジメント}』の腕章をつけた女の子が立っていた。

（いや、第一声から意味が分からないんですけど・・・）

もちろん上条はこんな女の子は知らないし、声をかけられた覚えもない。

すると歪が一瞬やれやれ、という顔をして

「あの、人違いじゃないでしょうか。俺達は一回も声をかけられて

いないんですが……」

なんか丁寧すぎる敬語で対応する。

なんだそのにこやかスマイルは、と上条は思う。

さっきの一瞬見せた心底うざったそうな顔はなんだったんだ、と思うくらいの好意全開の顔が、なんか怖い。

もちろん、一瞬見せた顔は風紀委員の少女には見えていない。

しかし、（本性は見えていないのに）なにが気に入らないのか、女の子はさらに顔をまっかにして。

「だから！^{テレパス}念話能力よ^{テレパス}念話能力。ちゃんと聞こえてるんでしょ！
？ほら！」

そういつて女の子はなにか力み始めた。

そうするとまたインデックスと風斬がさっきと同じ反応をする。

歪はこの短い間に彼女が何をやっているのか理解したようだ。

「ああ、^{テレパス}念話能力、ね。いろいろ種類はあるらしいけど、どれにする必ず『^{テレパス}限界距離』があるらしいから、俺には届かないんだよね」
歪は敬語がめんどくさくなつたのか、もう敬語をやめている。

なら最初から使わなけりゃいいのに、と上条は思った。

歪はどうやら常に空間を広げているので、距離が開きすぎて届かないらしい。

では……上条は……

（まあ、俺はどう考えても右手だよなあ……）

上条にとっては、便利な能力も打ち消してしまうのはいつもの事で、原因はわかりきった事なのだが。

自分の能力は全く届かないのが分かったのか、少女は力むのをやめ、何かを諦めたような顔をして。

「なんであなた達には届かないのかしら、私の『声』が。まあいいわ、口頭で説明するから」
そういつて少女はきはきと話し始めた。
いろいろ難しいこと言っていたが、まあ要約すると

この街にテロリストが侵入して、この辺にいるから民間人は逃げろ。ということだった。

「まあ、一般人が関わることも無いし、今日はここからさっさと非難して別の場所いこっか？」

歪はこの事件には関わらず、別の場所で遊ぶ算段をし始めた。

まあ、普通ならその選択は間違っていないし、むしろ普通の考え方だろう。

「確かにここにいるとまずいな………とりあえず、ここを出るか」

上条だって日頃不可抗力でトラブルに巻き込まれているが、自分から首を突っ込んでまた病院に行くほどのお祭り野郎じゃない。

……とは自分では思っている上条だったが、周りから見れば普通にお祭り野郎にしか見えない事は、本人は気付いていない。

早歩きで並べく早く外に出ようと歩いていた上条達はこのときはまだ、『日常』の中のちょっとした出来事^{ハプニング}だった。

しかし、たった一つの声で上条達の『日常』は完全に破壊される。

『
見つけた』

歪の前身(前書き)

なんか更新遅れました。
スイマセン(泣)

歪の中身

女の声だった。綺麗な声質をしているのに、それをタバコか何かで潰したような少しかすれた声。

その声を発したものの姿はなかった。

その声は壁の方から聞こえていた。

上条が声のした壁を見ていると、壁に変化があった。壁の表面がぐずぐずと溶けるように崩れ始め、何かを形作り始めたのだ。そしてあっというまに『何か』が完成した。

それは『目』だった。

まぎれもない、人間の目。上条と風斬がその場で硬直していた、突然の異常に脳がついていけない。

しかし、歪とインデックスは違った。インデックスはじつとその目を観察するように睨みつけ、歪はものすごく興味深そうな顔をしながらキラキラした目で見ている。その姿は例えるなら初めて見たオモチャをみるような感じの純粹な好奇心の目だった。

そんな中、『目』の周りの泥が震えて一つの声になる。

『うふ、うふふ、うふうふふ、イマジンブレイカー禁書目録に幻想殺しに虚数学区の鍵と………てめえは誰だ？、まあいいか』

そして

『一全部ぶつ殺しまえばどれも同じだし』

こえが明らかな殺意をもったものに変わった。

上条はこれがテロリストだと言うことはなんとなくわかったが、敵の正体の判断がつかなかった。

これは能力者かがくなのか、魔術師オカルトなのか、判断がつかない。

するといままでずっと黙って『目』を睨みつけていたインデックスが突然

「土より出でる人の虚像

そのカバラの術式、アレンジの

しかたがウチとよく似てるね。ユダヤの守護者たるゴーレムを無理やりに英国の守護天使に置き換えているあたりなんか、特に」

どうやらインデックスは上条達ではなく、その『目』に語りかけているらしい。対して、『目』は答えるわけでもなく、ただ笑っている。

インデックスがこのような反応をするということは、つまり……

「敵は魔術師テロリスト、なのか？インデックス」

上条が尋ねるとインデックスは首を縦に振った。どうやら予想は大当たりらしい。

『テロリスト？テロリスト！うふふ、テロリストってのはこんなこととする人のことを指すのかしら？』

『目』がそう言い終わった後、

ズドン！という爆弾のような衝撃が地下街を揺らす。

「なん……ッ！」

続いてやってくる地震のような衝撃に上条は大きくゆらついた。

音からして爆心地（爆弾なのかは分からないが）からは遠いはずなのに、これだけの衝撃。

もし爆心地に人がいたら、その人はどうなってしまふのだろうか？いや、実際に邪魔な人がいたから攻撃したのだろうか？

その衝撃で何か壊れたのか、きゆうに電灯がすべて消え、一瞬真っ暗になったあとすぐに非常用の薄暗い電灯がつく。

さっきまで落ち着いて非難していた人々が異常なこの状況に慌てふためいたのか、リアルに『生き埋め』を予想し死の恐怖に駆られたのか、パニックになり一斉に出口へ駆け出し始めた。

そして、その騒ぎの中に響く何かを動かすようなガシャガシャという音。

どうやら事態が深刻化したせいか、アンチスキル警備員が予定よりも早く

まだ中に人がいるのに 隔壁を下ろしたのだ。

閉じ込められた。

これも相手の計算なのだろうか？上条達を閉じ込め、逃げ場をなくしてからじっくりとしとめようとしたのだろうか？

だとしたら、上条達じゆうはまんまと敵の策略にはまったということになる。

気がつけば、『目』がだんだんと崩れていた。そして最後に断末魔のように吠える。

『さあ、パーティーを始めましょう 土のかぶった泥

臭え墓穴の中で、存分に鳴きやがれ』

そして、また一段と近い場所から衝撃が走る。

すると歪は目をキラキラさせ、

「相手は魔術師か、それもゴーレム使い」

「そうだね、あの『目』もゴーレムの応用だね」

「へえ、あんなこともできるんだ。ゴーレムって」

(・・・あれ?)

上条はいまの歪とインデックスの会話に違和感を覚えた。

二人のはなしは噛み合っていないまま話を続けているわけでもない

というより話が噛み合いませんじゃないか？

「え？・・・いや、ちよつと待て、歪？おまえ魔術師って・・・」
「え、おかしい？」

なんで歪は魔術師なんて単語についてこれる？まるで初めて聞いたわけではないような・・・

「魔術師って知ってたらオカシイ？」

歪はこれが常識の範疇のようにあっさりと答える。

（なんで・・・歪魔術師「コイツ」をしっている！？）

上条は初めて、歪に敵意を向けた。

上条には、土御門元春「つちみかどもとほる」という同級生「クラスメート」がいる。学園都市にいるのに魔術師にも通じているとんでもない多角スパイ。

だから、上条の周りに魔術師を知っている科学側「にんげん」がいないわけではない。
だから、もしかしたら・・・

だが上条の予想とは裏腹に歪は、

「いやあ、学園都市とは別の超能力者でしょ？ちよつと新興宗教じみてるけど、すごく強いよ」

真剣な感じで言い放つ。

「む〜！ひずむ！魔術は新興宗教なんかじゃなくて立派な教会の

§ 11 | ———— |

余計な事を口走ろうとしたインデックスの口を無理やり手で塞ぎながら上条は考える。

（なんだ？教会の事は知らないのか？・・・）

いまいち歪の魔術師に対する常識の線がよく分らない。

「ちょ、ちょっと待て歪！なんで魔術師しってるんだ？」

上条が確認するために問いかけると歪は

「ん。前にちょっとだけ襲われた事があったね。その時に知り合っ
たんだ」

少し苦い顔で歪は答えた

（て、いうことは・・・襲われたから知ってるだけ・・・なの
か？・・・はぁー！よかった！私上条さんはまたやっかい
なスパイとお知り合いになったのかと冷や冷やしましたよ）

上条は少しほつとするがそんな暇はない。今も着々と敵が近付いて
いるのだ。早く何とかしなければならぬ。

「とりあえず、俺はあの魔術師を止めてくる。歪はインデックスと
風斬を頼む」

「それはとうまの方なんだよ！ここは私に任せて、とうまはみんな
を連れて逃げて」

「お前の細い腕でケンカなんかできるか！」

「素人なのに魔術師と戦う方がもつとおバカなんだよ！」

二人がぎゃあぎゃあケンカをしていると

カツン、カツンと誰かが歩いてくる音がした。

「逃げる！インデックス！」

二人は同時に叫び、上条が右に、インデックスが左に駆け出す。

だが、立ち位置が悪かった。

二人はお互いの足にけつつまずいて、ど派手にこける。

そして、そうこうしている間に足音の主が現れる

歪の前身（後書き）

風斬さんが空気です。

彼女の活躍とかきたいしていた人、スイマセン。

あと、「風斬」って一発変換できないんです。

書く時毎回困ります

地下街のケンカ（前書き）

更新遅くなりました。

学期末は大変な事がたくさんあったので

地下街のケンカ

倒れている二人を守るうと立ちふさがった歪の前に現れたのは二人の常盤台生徒だった。

一人は茶色い髪をツインテールにして風紀委員の腕章をつけた白井黒子。

もう一人は茶色い髪を肩まで伸ばし、お嬢様という単語が絶対に似合わないような感じの御坂美琴だ。

「あんだ、そんなトコで女の子に押し倒されて、何やってる訳？」
美琴は髪から青白い火花を出しながら質問する。

「……、あらあら、こんな時間から大胆ですこと」
どうやら二人とも床に倒れている上条の知り合いらしい。

歪は二人を指差しながら。

「上条、この人たちって知りあい？」

すると上条は若干困ったような顔をして

「まあ、な。前に色々あつて知り合つたんだ」

歪は人の交友関係って不思議だな、とか思いつつ

ふと気付いた。

「ふん。……あれ？……この人常盤台の超電磁砲
？」

「あ、やっぱり知ってるのか。」

上条はなんのけなしに答える。

すると歪は

「そりゃ、色々破壊しまくってる超能力者一の暴れん坊だから。顔
くらいは覚えとかないと思つて」

ビキ！

上条には何かにひびが入るような音をリアルに聞いた。全身から冷や汗がダラダラ流れてくる。

すると上条が予想してた結果が訪れる。

「誰が・・・暴れん坊ですつてえ？」

本格的に怒り始めた美琴は照準を歪に向けて髪から火花を出す。

マズイ、かなりマズイ。

こんな狭い所で歪と美琴が戦うなんてマズすぎる。敵に知られるということもあるが、なにより風斬やインデックスが絶対に巻き込まれる。

「ほら、そんなことで敵意全開なのに、暴れん坊じゃないって言い訳は無理なんじゃないかな？」

歪はなんか美琴を挑発してるし。

美琴は今にも電撃を発しようとしてるし

「お、お姉さ

「ま、まてよ御坂。そんなことより今はこの状況をなんとかするのが先だから、さ、こんなところで火花散らしてる場合じゃねえだろ？な？」

この状況がかなりヤバいと感じた上条（あと黒子）は誠心誠意のジエスチャーを混ぜながら二人を鎮めようとする。

「まあ、確かにそんなことよりもまずはそっちだね

歪は事の優先順位は分かっているようだ。

「・・・確かにそうね。でも、今度会ったら真っ黒コゲにしてやるから覚悟しときなさい」

とりあえず今この場での戦いは避けられたようだ。

無茶苦茶安心した上条はホツとしたが少しの疑問が浮かんだ。

何故、美琴に対して歪はこんなに敵意をむき出しにしたんだろうか？

(まあ、こんな状況だし。気が立ってたんかな？)

そんな感じに上条は頭に沸いた小さな疑問を勝手に解釈する。

すると

「とうま、ちなみにその品のない女はいつたいどの何子ちゃん？」

インデックスが新たな導火線ゴタゴタに火をつける。

美琴は火花こそ出さないものの、好戦的な笑みを浮かべ始め、白井は品のないという言葉にカチン、ときているようだ。

(ちよ、ま・・・ッ！インデックス！？なんで今このタイミングでいらんこと言うんだ？おまえは！？)

「やっぱりとうまの知り合いなの？」

「やっぱりって

ちよっと待ちなさい。てことはア

ンタも？」

「・・・・・・・・・・えっと。命の恩人だったりする？」

「あー・・・・・・・・・・もしかして、そっちも頼んでないのに駆けつけてくれたクチ？」

「・・・・・・・・・・」

二人は少し沈黙し、同時にため息を吐いた。

お、なんかピリピリした気配が無くなっていくぞ？、と上条はのんきに考えていたが、

「とうまアンタ！私の見ていない所で何やってたか説明して欲しいかも！

！」

ターゲットが変更されただけだった。

ひい！、と怯える上条。上条を睨みつけるインデックスと美琴。二

人の迫力に、自分は何もしていないのにオドオドする風斬。何か黒い笑みを見せながらブツブツ言っている白井。

どう考えてもここは第二の戦場と化していた。

そんな絶体絶命の上条を救ったのは歪だった。

「みなさん？そんなことしている内に敵きちゃうよ？」

みんなが一気に歪を注目する。

「その通りですわね。私の能力でみなさんを地上に送ります。一度に二人が限界なので、何回か分けておくりますわ」

空間移動テレポートを使える白井には密室だろうが何だろうが関係ないのだ。

「うーん……一度に二人か……じゃあ最初はインデックスと風斬で」

上条が特に考えずに言う

「とうま。つまりとうまはこの短髪と残りたい。そういうことだね？」

インデックスが歯並びのいい歯をちらつかせていう

「あゝ……じゃあ美琴と風斬で」

このままでは絶対に噛みつかれると悟った上条は急いで別の組み合わせを提案する。

すると今度は美琴が

「へえ〜。アンタはそこにいる小っこいのと残りたい、と。ほほう」
火花をバチバチ鳴らしながら反対する。

「ん〜と……じゃあ歪と風斬だったら文句ないだろ？」

だんだんイライラしてきた上条は投げやりな感じで言う。

どっち道上条以外全員外に出れるのだ。早いか遅いかの問題なのだから、上条としては順番なんかどうでもいいのだが……

「あれ？そういえばひずむはどこ？」

「え？」

インデックスの疑問に上条があたりを見回す。

いない。

歪はいつの間にか煙のように消えていた。

戦闘直前（前書き）

いや）、とある事情により親の逆鱗に触れ、少しPC没収されてい
ました

（T―T）

没収大好きなうちの親、携帯もその餌食になって帰ってきていませ
ん……

まあ、そんなことはともかく

一時返却なので短いですが、読んでいただければ幸いです

戦闘直前

………で結局。

歪がいなくなり、騒ぐ二人が満足する組み合わせを考えなくならなければなくなり、両サイドから大声量攻撃を喰らい頭がパンクしうになった上条を見かねた白井がインデックスと美琴を空間移動^{テレポート}。結局残ったのは上条が一番最初に逃がしたかった風斬になってしまった。

「悪いな、こんなことになっちまって……」
もともと敵の狙いは自分とインデックスのようだったし、そもそも自分が誘わなかったら風斬は今頃事件とは全然関係のないところにいたかもしれない。

「いや……私は別に……」
風斬はあまり気にしていないようだが、巻き込んだ上条としてはなんだか申し訳ない。

そして

ズズン！

また大きな振動が襲ってくる。上条と風斬は大きくよろける。振動はもうだいぶ近くにやってきているように感じた。

「……俺はアイツを止めてくるから、風斬はここで待っていてくれ」
そう言つと同時に上条は走り出す。

後ろで風斬が何かを言っていたようだが、上条にはよく聞こえなかった。

(確かさっきの振動はこつちからだつたな……)

頭の中で思い出しながら上条は角を曲がる。
こんな争いを少しでも早く止めるために、上条は走り続ける。

一方その頃

魔術師シェリー・クロムウエルはイラついていた。

自分で行きたいところがあるのに、目の前にいる機動隊のようなものにマシンガンを撃たれているのだ。

もちろん弾丸それはシェリーには当たらない。

弾丸は目の前にいる石像　　ゴーレム「エリスにあたって全てはじかれる。

まあ、自分の目的には外れていないか……

そんなことをシェリーは適当に考える。

だが、弾丸が邪魔でエリスがうまく前に進めないのはシェリーをイラつかせる。

そのイラつきは虫や何かが自分の周りを飛んでいるのに似ていた。意味も無いのに続けるからうざったいのだ。

そしてしびれを切らしたのか、機動隊の一人が手榴弾を取り出してピンを抜く。

その行動をシェリーは見逃さない。

シェリーは軽く手に持ったオイルパステルをふるう

その瞬間、エリスが足を大きく振り上げ、そして振り下ろす。

ズドン！！

ものすごい音とともにまた地震のような揺れが起こる

振動で手榴弾をうまく投げることが出来ずに足元にコロコロ転がる。悲鳴のような音が聞こえたようだが、すぐに爆音でかき消された。土煙の中にいる奴達の様子を見たが、どうやら動けるものはいないらしい。

邪魔ものは消えた、そう思いシエリーはエリスを連れそこを去る。

シエリーが進む方とは反対の方からは、一人の少年がシエリーを追いかけていたことを、シエリーはまだ知らない。

歪のその後（前書き）

ずいぶん遅れました・・・こんな小説でも読んでくれる方々、
本当に御免なさい。

歪のその後

「なんだよ……これ……ッ！」

上条の視界に現れた景色はひどいものだった。

それは全員傷だらけで下手したら立てないものも混じっている二十人弱の警備員の人たちだった。

警備員だって日々能力を使ったり、拳銃を使ったりといった犯罪者と戦っている。戦闘力でいえば警察の機動隊を通り越して自衛隊レベルだ。

それがこの有様。

手榴弾でも暴発したのか、あたりには火薬のにおい、それと血のにおいが混じっていた。

（つつか、どんな野郎だ警備員相手にここまでやる魔術師ってのは……）

上条がさらに奥へ進もうとすると、そばに倒れていた警備員の女性が足をつかむ。

「こんな所で何してるじゃんよ……ってよく見たら小萌先生ん所のがキじゃん。逃げるんだったら行く方向が逆じゃんよ」

普段の上条なら警備員の口から小萌先生という名前が出てきた事に驚くはずだが、今の上条にはそんなもの届いてはいなかった。

警備員は仕事ではない。一種のボランティア、先生が生徒の身を案じて見回りをするという行為を成長させたようなものだ。つまり、危険だと思ったら逃げても誰も責めはしないだろう。なのにここにいる先生達は逃げるようなことはしなかった。生徒を守るために死

ぬかもしれない戦場へ出て生徒こどもの代わりに傷付いた。上条はそれが許せなかった。

この先生達おとなを傷つけたものを、許せなかった。

上条は前へ進む。もう上条には警備員アンチスキルの声なんて耳に入っではないなかつた。

一方

「あらら……ここどこだっけ？　つか、初めから知んないのか」
歪は手に飴袋をもって暗い地下道を歩いていて。まあ、道に迷ったのだが。

「うーん、とか言いながら歪は壁に向かって歩いていく。そうして壁を難なくすり抜けるそうして壁の向こう側に出る。

歪の歪空間は基本てきに形は自由自在だ。コンクリートのわずかな隙間という空間があれば壁をすり抜けるなんて簡単なのだ。つまり『個体』のように形が変わらない空間を自分の思いどおりにできる空間を生み出すのが歪の能力の本質だ。

（音のする方へ障害物突っ切ってきたんだけど……敵が移動したのか……やっぱこれは土地勘が無い所で使うもんじやないな……）

そんなこんなで歪は若干途方に暮れていた。ちなみに手に持っている飴袋はさつき壁抜けしたときにくすねてきたものだ。事件中の盗難防止のため、店にはシャッターが下りていたが、歪にはそんなもの関係なかった。ちなみに品名は『人形キャンディー ザク口味』というホラーっぽさ満載の、世界中探しても学園都市だけにしか売って無いだろうシユールなものだった。うまいからいいけど。

ふと横を向いたら地下街の出口の一角だった。大勢の人がいて、たまに二人くらいいつぺんに消える。

(……消える?)

よく見るとそこには風紀委員ジャッジメントの少女がいた。空間移動テレポートで逃げ遅れた人々を外へ避難させているようだった。

(大変そうだな……白井さんだっけ。知らない人でもないし……よし)

歪は白井へと駆け寄って声をかける。

「手伝おつか？」

不意に後ろから声をかけられたからか、白井はびく！つとしながら振り返った。

「なんだ、あなたですの。お気持ちは嬉しいのですけどあなたも空間移動レポートができるなら早くお逃げなさいな。私これが仕事ワタクシですので」
「どうやら一般人の手を借りるのは風紀委員ジャッジメントとしてのプライドが許さないのだろうか？」

「でも、俺がやった方が効率いいし、やらせてもらうわ。後ろにいてくれ無い？間違えて君まで外に出すかも」

歪がそう言つと白井はしぶしぶといった感じで後ろに下がった。

「んじゃ、空間拡張スペースアップは……これくらいつと、二十人くらい余裕余裕」

歪は両手を左右に広げ、走り出す。まあ、要するに避難対象をいつ

たん亜空間に入れ、シャッターをすり抜ける。ただこれだけである。歪が外から戻ってきた時は白井はきよとんとした顔をしていた。まあ、こんな能力は学園都市でも滅多に見られるものは無い。まあ、このままだと早く外でろ、と言われるのは目に見えてるので今の内に自分はここを去るとするか。

「じゃ、」

そう言って歪は壁の中へ消えていった。

Unknown

「か・風斬りイイイイイイ!!」
上条は叫びながら走った。

魔術師シェリー・クロムウエルとそのゴーレムまじゅうに背を向けて、サッカーボールのような大きさのコンクリートが頭に激突した風斬氷華かざきりひょうかのもとへ。

完全に予想外だった。

いや、十分に予想は出来た。一人になった風斬が不安になり、上条の後を追って敵の目の前に不用意に現れる事は少し考えれば予想がついたことだった。上条は必死になって　まるで放り投げられた人形のように数メートルも吹っ飛んだ　風斬のもとへ走った。

「かざ　　」上条は風斬の傷を見た瞬間、背筋が凍った。
それはほんの少し前、一緒に遊んでいた少女が脳漿ういじょうをぶちまけていた……からではない。

逆だ

風斬の傷からは中身はおろか、血一滴も流れていなかった。

それもそのはず、風斬の中身が空っぽだった。血管や脳と言った部位が見つからず、まるでプラスチックのような皮膚の裏には電子機

器の基盤じみた模様が浮かび上がっている。その中心には、キーボードのように今もなおカタカタの動き続けている三角柱のようなものがあるだけだ。

シエリー「クromウエルも予想外だったのか、信じられないモノを視るような顔をしていた。

何だ、これは？

上条は思う。学園都市は確かに色々な能力がある。ささやかなもの、便利なもの、はては核攻撃も効かない超能力者もいる。

だが

こんなにもヒトの体を作り変える出鱈目な能力は存在するんだろうか？

「う………」

風斬は意識が戻ったのかまるで寝起きのような声を挙げる。

「あれ？……眼鏡は………」

眼鏡をかけていた所へ手を持っていくが、そこには眼鏡はおろか、自分の顔も、中身も無い。一瞬指が見えない階段を踏み外したようにビクツと動いた。

「なに……これ………?」

風斬の指が砕けた輪郭をなぞる。目線がすぐ横にある喫茶店のウィンドウに移る。そこには風斬の無惨で不可解な姿がはっきり映っている。

「い、やあ……なにこれ……いやあ!!」

風斬は鏡に映る自分の像から逃げ出すように走る。上条を通り越し、シエリーのゴーレムの方へ。

Unknown (後書き)

書いてて、アレ?なんか暗くね?とかおもたっけど気にしない

歪ひよのその後？

上条が携帯で小萌先生と通話し始めたころ

「あれ？」

歪ひよは今通り抜けた壁を見る。うん、やっぱり自分はここを通り抜けた、間違い無い。

Q、じゃあ何で壁の向こうにいるはずの白井さんが目の前にいるんでしょう？

「あれ？白井さん、なんでここに？」

「私の能力は空間移動テレポルトですの」

簡潔に答えられた。でも空間移動能力者って能力使うときは細心の注意が必要なんじゃなかったっけ？意外と無茶するなあ、この子。

「何でここに？」

何がまずかったのか白井はジトツとした目で睨見ながら

「……それはこっちのセリフですの。あなたは風紀委員ジャッジメントではない一般市民、そのよく分からない能力を使って早く外に出なさいな」

こんなことを口にした。

「いや、俺は……」

核攻撃でもない限り大丈夫、と言おうとしたが、

「いや、とか。でも、とかの問題ではありませんの！！」
ものの見事に遮られた。

さらに『なぜ・・・』とか『全くお姉様は・・・』から始まる説教やら愚痴の弾丸が歪を襲う。しかし歪はうまい具合に『ええ・・・』
『はあ・・・』『すみません・・・』などと相槌を入れて難なく防ぎきる。もちろんほとんど記憶していない。

一回火が付いたらなかなか止まらない性格なのか、白井はまだ一人で何かブツブツ言っている。

「全く、どうしてこう私の周りには無謀な方が多いのでしょうか？あのツンツンの類人猿は戻ってきた時は後片も無く消えていましたし、色々ストレス溜まってんのかな？と思いつつと壁を抜けようとした歪はその言葉でピタッと動きを止めた。

(・・・ツンツン頭の類人猿？それって・・・)

「待った、白井さん。上条は外に出たんじゃ・・・」
「多分出てませんの。全く何処をほつつき歩いているのか」

よく見ると、白井の顔には焦りの色があった。無理もない、一般市民を守る風紀委員ジャケットとしては今まで自分の目の前にいた者が傷つくのは我慢かならないだろう。目の前の人を守るために風紀委員ビョウが居るのだから。

しかし、歪はここを出る訳にはいかないし、ここで立ち止まりもしない。自分の能力は誰かを守るにはうつつつけの能力なのだから

「……白井さんはまだ逃げ遅れている人の所へ行つて」

気が付いたらポツリ、と歪は呟いていた。

「だから、あなたも即刻非難を

」

「俺の、役目でもあるから」

何かを言いかけた白井の動きが止まった。……納得してくれた、のかな？どっちにしろこの隙は歪にとっては大チャンスだった

「ほら、こんな能力を持ったんだから、誰かを守らないと。じゃあ、行くね」

そう言つて歪は壁に向かつて走り出した。壁を通り抜けた先には、白井の姿はなかった。

「……よし」

アシチスキル警備員を見つけたら話して、逃げると言われた方と逆に走ればとりあえずこの騒ぎの中心に行けるだろう。そこにきつと上条もいるはずだ。

「全く、なんですか？あの殿方は」

白井黒子はため息をつく。能力も変なら性格も相当変である。壁をすり抜ける能力者なんて何でもし放題の出鱈目ではないか、幸いなのはその能力を悪用しない性格だった事だろうか。

「にしても……あの顔は……」

あの男が最後に見せた顔は、平凡な人生を歩んだ顔ではなかった。

誰かを守る決意ではなく、罪を償うことに必死にもがくような顔。

一体どんな過去があればあんな顔が出来るのだろうか？極めつけは彼自身はその顔になっていいる事に全く気付いていない、と言う事。

そう、白井の行動が一瞬止まったのは、納得したからではなく、あまりに悲惨な彼の顔に思わず固まってしまったのだ。

（あんな顔をされては、止められせんわ……）

白井は内心悔しがりながら、ほかの出口で出れなくなっている人の元へ急ぐことにした。

開幕直前

上条は地下街を目いっぱい速度ではしっていた。

風斬氷華かみきりひょうかは人間ではない、学園都市のAIM拡散力場が生み出した現象にすぎなかった。

携帯に掛かってきた小萌先生こもえの報告に、上条は正直指の先から血が引いた。それはそうだろう、今まで一緒にいた友達が、人間では無かったのだから。

だが、それがなんだ。

確かに風斬は人とは体の作りが違うかもしれない、この右手で触れたら一瞬で壊れてしまう幻想かもしれない。けど、風斬は確かに上条当麻の友達なのだから、見捨てる理由なんてどこにもない！

早く風斬とシエリーに追いつこうと全力疾走していた上条は周りに注意を払っていなかった。

だから、

上条の脇腹あたりの壁から何かが出てきたのにも、反応が遅れた。

「ッ！」
上条の体から体温が消える。魔術師シエリー・クロムウエルは、周りの土や壁などを素材にして、ゴーレムを造っていた。

そしてあのゴーレムは、自分の近くで一体だけしか造れないのか？
もし、遠隔で大量に造る事が出来たとしたら……

上条は戦慄する。盛り上がった壁は左側、右手がすぐには反応しない。

（マズッ！）
上条は右に跳ぶ。しかし前方に全力疾走していた体はうまく跳ばず、数センチしか跳ばない。これでは全長4メートル近くあるゴーレムの攻撃はよけれない。だから上条は、自分の鳩尾みぞおち近くにある出っ張りへ向けて右手をふるう。

そして次の瞬間。

上条の額に鈍痛が走った。

「みぎゃっ……！」

「ッ……！！……！！」

間拔けな声を上げて上条は床を転げまわる。イタイ、マジデイタイ。
一方通行の鉄骨や右腕切断よりも痛い。一瞬上条の視界には、ほしが5、6個見えた。

「……！！」というか、オカシイ。上条は確かにゴーレムを

壊したのだ。では何が上条の額に当たったのだろっ？

とうるか、さっき自分とは別に声にならないうめき声が聞こえたよ
うな………？

上条が涙で滲む視界で周りを見ると、

「ああああああああああ………」

涙目で頭を押さえながら呻いている歪ひずが床に倒れていた。

(上条の……右手のせいで、能力が……解除されたのか………)

痛みなどほとんど感じてきたことの無い歪には相当こたえる一撃。
壁にめり込んでいる途中で能力が切れたら無理矢理広げた空間が元
に戻って大惨事になるところだったことを歪は上条に説明する。

………まあ、余所見していた自分も悪いのだが。

その代わりに上条に聞かされたのは驚くべき真実だった。

「風斬は人間じゃない、ね………。でも助けるんだろ？」
言っつて、これは聞くようなことじゃないな、と歪は思う。答えは分
かりきつている。

「ああ、あいつは俺たちの友達だ。見捨てるなんて出来ない」
上条が次に口を開く前に歪は先手を打つことにする

「まさか、ここまできて『危ないから引き返せ』とか言わないよね？」

「うぐっ」

凶星、やっぱり上条はまっすぐで、分かりやすい。

「分かった。無茶はすんなよ。」

「分かってる」

手遅れになる前にと二人は走る。おそらくもうすぐ先に、あの魔術師はいるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4666/>

とある転校生の亜空間膜（ゾーンベール）

2011年9月26日16時25分発行